英　語　科

蒔　田　　守
肥　沼　則　明
久保野　り　え
植　野　伸　子

新学習指導要領に対応した授業作りの工夫 (2)

1. はじめに

本校英語科では，平成8年度より4年間で「3年間を見通した英語指導～『聞くこと』『話すこと』を中心として」を研究テーマに掲げ，「育てたい生徒像」(①「生きたことば」でコミュニケーションができる生徒，②困難に対して臨機応変に粘り強く取り組める生徒）を設定し，「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の3年間の指導計画を作成した。また，平成12年度からは「『自立した学習者』を育てるカリキュラム作り」をテーマに掲げ，4年間で「自立した学習者」を育てるための4つの要素（①授業，②家庭学習，③授業以外での良質な input，④英語を使った独自の楽しみ）を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案するとともに，生徒の学習を阻害する要因に着目して学習を継続させる手だてについて考察した。

一方，平成10年12月に文部省より告示された小学校学習指導要領によって，小学校の総合的な学習の時間で「国際理解」の一貫として英会話を行うことが可能になり，現在ではほとんどの小学校で何らかの形で英語の授業が行われている。この傾向は，平成20年3月に文部科学省より告示された新小学校学習指導要領において，第5学年及び第6学年に「外国語活動」という領域が教科と同列に新設されたことによって，ますます加速するものと思われる。このような流れに対して，本校英語科では，平成16年度から3年間をかけて「入門期指導を改めて考察する」という研究テーマを掲げ，入門期指導のあり方と具体的な指導内容の提案を行った。また，平成19年度には「小学校で培われた力を活かし，高校につなげる中学校3年間の指導～小中高一貫カリキュラムの作成過程で見えてきたこと～」をテーマに掲げ，小学校と高校における英語学習との連携を意識した中学校の英語学習指導のあり方を議論した。

上記のように，本校英語科は，時代の要請によるものだけでなく，英語教育において恒久的に追究されるべき内容を研究してきた。そして，英語科教師全員のコンセンサスを得て，授業を含めた学習指導全般においてそれらの共同実践を行ってきた。

2. 本年度研究テーマ設定の理由

平成20年3月に文部科学省より告示された新中学校学習指導要領は，現行のそれとは大きく異なる点が何点かある。その主なものは，授業時数が増加することとそれに伴って指導すべき言語材料や言語活動が増加すること，4技能をバランスよく総合的に扱いながら統合的な活動を行うこと，より正確な理解力と表現力を身につけることが求められること，そして新たに導入される小学校の外国語活動で学んだ内容をより着実な知識や技能として定着させることである。

これらを受けて，本校英語科では昨年度「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに掲げ，4技能を総合的に育成するための統合的な活動の例を含めた3年間の授業作りの工夫について提案した。そして，①1年生に対する4技能の総合的育成を行うための指導，②2年生以降の「読むこと」を中心とした統合的活動，③「聞くこと」「話すこと」「書くこと」を統合的に使用した言語活動を紹介した。しかし，上記の3つの視点では紹介しき

れなかった指導内容が他にも数多くあることや，新学習指導要領の完全実施に向けて本校英語科としても改めて見直さなければならないカリキュラム編成上の課題があることから，本年度も昨年度と同じテーマで研究を進めていくことにした。そして，他の中学校でも実践できる指導内容とそれを支える指導理念を一定の形にまとめて提案することにした。

3．現状と問題点を踏まえて小中連携をいかに進めるか

(1) 中学校教員が肌で感じる新入生の変化

① 新入生の明らかな変化

本校では入学準備説明会を毎年２月に実施している。毎年，英語科は時間をとり，英語で進める授業のデモンストレーションを行い，生徒・保護者の不安を低減し，保護者に学習記録の記入やテープレコーダー準備の依頼をしている。かつては英語で話し始めたとたんに会場に緊張感が走り生徒の顔がこわばった。しかし，ここ数年間で状況は一変した。こちらが "My name is ～．Nice to meet you." と満面の笑みで話しかけ，２～３秒待つと，"Nice to meet you, too." と大きな声で生徒が返答してくれるようになった。定型表現については英語は身近な存在となっている。

一方で，４月の授業開きでは，かつて見られた「さあ英語が始まるぞ！」といったキラキラした瞳は失われている。授業での緊張感は低減され，英語へのハードルは確かに低くなり，積極的な発話も見られる一方で，英語学習を舐めているとしか思えないような言動やもうあきらめているとしか思えないような生徒も見られるようになった。

このような現象は他の公立中学・私立中学でも見られると多くの教師から報告されている。小学校英語の「光と影」といったところだろうか。

② 年度ごと・学校ごとに異なる変化

関東地区大会・全国大会といった大勢の教師が集まる場面では，上記の変化が報告されるものの，それぞれ地域により，また年度により変化の度合いが異なっているとの指摘もなされている。その理由は，当然小学校の指導がどのようなものであったか，具体的には，いつから英語活動をはじめ，どのようなプログラムで，何を教材に指導したかの違いによると思われる。

これまでの小学校での取り組みはあまりに多様で，「総合学習の時間における英語活動」や「特区における教科としての英語」の成果はそれ自体素晴らしいものでありながらも，「英語活動」としての方向性を示すものではなく，小学校における児童の可能性を追求したものとして理解している。

(2) 小学校教員の意識

① 漠然とした状態

近年，「小中連携」に関する講演やワークショップ，また小学校での「外国語活動」公開授業の指導助言依頼が増加した。様々な地域で，異なった状況の下での取り組みを見たが，次のような共通点が見られた。

新学習指導要領のもとで「外国語活動」が始まるにあたり，地域や学校によって開始学年が異なっていたり，外国人指導助手の配置に大きな差が見られるなど，現実的な対応を行ない，それぞれの地域で一生懸命にできるだけの努力をしている。しかし，「小学校」

という枠の中で漠然とした状態のまま，試行錯誤の最中でその先にある「中学校」での学習にまで思いを馳せるゆとりは見られない。

② 難しいゴール設定

従って，小学生が卒業した後のこと，すなわち中学校英語の入門期にあたる部分にどのように橋を架けるべきかといった観点を持つことが難しいようで，「英語ノート」や「電子黒板」の扱いに苦慮している印象が強い。

中学校教師の目からは，週1回・2年間の学習で英語ノート2の最後の項目 "I want to be a ...." にまで導くには，相当の困難が予想される。中学校で英語科の教師が，週3時間英語の教科書で4技能をバランス良く学習しながら，一方で家庭学習や問題集・ワークブックなどで補いながら進んでも，検定教科書のペースからすると1年半かかる到達地点であるからだ。

授業本体の進め方や教材のあり方が定まらない中での授業だから，最終のゴール設定が困難になることは致し方ない。しかし，どこまでが小学校で，どこからが中学校なのかはっきりさせないまま引き継ぐことは大きな問題であり，結局生徒が泣くことになる。これだけは避けなければならない。

(3) 根底にある問題

① 小学校教員の抱える苦しみと矛盾

元来小学校教員は英語を教えることを想定して免許を取得していない。また，トップダウンで導入されてきた事柄に，面と向かって反対できるものではない。小学校で英語を教えるとなれば，そのために何かの時間が削られる。そこまでして導入すべきことなのかといった疑問がくすぶっていてもおかしくはない。

小学校の担任がALTとTTで教え，担任もできないながら頑張るところを示すことに教育的価値があると言われている。しかし，かつて中学校にALTが導入された時，最初に逃げ出したのが英語の教師だったといった冗談がまことしやかに囁かれていたことを知る者にとっては，その負担の大きさは想像に難くない。今回小学校に導入される「外国語活動」は教科ではないが，中学校教員が免許外の教科を教えるときには，それ相応の手続きが必要となる。一方，充分とはいえない研修を受けただけで，外国語活動を行うために教壇に立たねばならない小学校教員の不安はよく理解できる。

② 救世主となるか？中英免許を持った小学校教員の登場

中学校英語の免許を持ち，同時に小学校の免許を取得した教員が，現場に登場しつつある。これらの教員は状況を解決する救世主となり得るのか。

中学英語と小学校英語は，考え方や方法論に差があるようだし，まして新任教員であれば，まず学ばねばならないことがある。問題解決の即戦力とはなりがたいだろう。

③ 中学校側の対応の難しさ

一般的に中学校側は今までと同じ対応をしているようだ。従って小学校で貴重な時間を使って経験したことが生かされていないことが多い。個別の対応が不十分であることは，特区で教科として学んだ生徒の経験を生かし切れないといった事例に顕著に表れている。

確かにバラバラな経験を持った生徒を扱うのは大変なことではあるが，それは英語科教師が今まで中学校から始めていたという特殊事情によるもので，他教科の教員は学力差や

教科に対する興味を失った生徒に対する働きかけをずっとしてきたことを思えば，中学英語科の奮起が期待される。

(4) 本校英語科教員が体験した小中連携の試みを通して見えてきた事柄

① 全ては小学校に支えられている

本校での，What am I?, Show and Tell, Speech, Chat などの発表活動に関して，かつては「我々が一から指導して，ここまで生徒を育て上げている」と理解していた。ところが，附属小学校の授業を参観するにつれて，これらの発表活動のもとになる訓練は，実は小学校で徹底的になされ，我々中学校の英語科教師はそれを引き継ぎ，言語形式を日本語から英語に変える部分を担っているにすぎないことを自覚した。全て骨組みは小学校で仕込まれているのである。

② 実際に授業を見ることから始まった

以上のことに気付いたのは国語の授業参観をしてからのことだった。始めはビデオで詩を暗唱する様子を見，ぜひ生で見学したいと申し出て，英語と国語の授業を参観した。英語の授業でも多くの発見があったが，国語の暗唱発表の授業では，本校生徒の豊かな表現力の源を発見することができた。近くて遠い学校であった附属小学校に足を運ぶことから全てが動き始めた。

また，附属小学校の教員に中学１年生の授業を見てもらう機会を持った。附属小学校の教員は驚いた。昨年までつまらなそうに授業を受けていた生徒が生き生きと目を輝かせて英語の授業に取り組む姿にびっくりしたという。進学を機会に良い意味で学習に対する構えがリセットされたのだろうと話した。

③ 小学校の新卒教師向け手引き本に学ぶ

一般的に小学校教員の子どもの扱い方に学ぶことは多い。心からの賞賛や笑顔の優しさ，間髪入れぬ叱責など，その観察眼の鋭さに驚かされる。たまたま出会った初任者向け図書から，教師として変わらぬ視点がきちんと記述されていることに驚き，同僚と読みあった。

このように我々は，直接的・間接的に小学校教員に多くのことを学んできた。

(5) 小中連携に欠かせぬ観点

① 対等な関係を築く

以上の体験から，英語指導に関して中学校がリードしていると考えることは誤りだと言わねばならない。確かに中学校英語教師は英語を上手に操ることができ，英語を教えることには長けている。だからといって小学校教員を見下して良いはずはない。

大切なのは児童・生徒の健全なる成長だ。そのためには，まず対等な関係を築き，互いの立場を理解することが肝要だ。中学の枠組みに当てはめるために鋳型に組み込むような指導を小学校にお願いすべきではない。それぞれの発達段階に応じて，具体的に何ができるようになってほしいか，中学校側が知恵を貸して小学校の目標をきちんと設定できるようにしたいものだ。

② 通学区での授業を見せ合い，問題点を共有する

本校および附属小学校の教員が児童・生徒の可能性に気づけたのは，互いの授業を通して生徒の生の姿を見ることで始まった。これが可能になったのも，年３回は小学校・中学

校・高等学校・大学の教員が集まり，その年の課題を設定し，実践を報告し合い，その結果をまとめてきたからだと言えよう。

日常の業務をこなすだけでも大変に忙しい日々を送っている教員だが，生徒指導だけでなく教科指導においても，生徒がまっすぐに歩めるようにその道を整えることも大きな役割であることを改めて肝に銘じたい。

③　コミュニケーションとしての英語学習が成立する学校作り

授業は単位時間の授業時間だけで成り立ってはいない。朝の会や昼の放送，終礼などで級友の話に耳を貸せない学級・学年では真の英語使いは育成できない。なぜならば英語も日本語と同じでコミュニケーションの手段だからだ。

けんかや行き違いがあっても，一時的なものと考え，自分のことだけでなく，級友のことも大切にできる学級・学年・学校作りを目指したい。

(6) 中学校としてすべきこと

①　変化への対応

冒頭に述べたように生徒は変わってきている。「週１時間で何ができる」と高を括ってはいけない。中学校においても，週１時間で勝負している教科があるのだから。

一生懸命に取り組んでいる小学校の先生や子どもたちの頑張りを無にしないために，何をどこまで取り組んだかは把握しよう。その上で，だったらこれはどうかなと新入生に問いかけてみよう。たとえば，アルファベットや数字を英語らしいリズムやイントネーションで発音できるか試させ，「習ったこと」と「実際にできること」に差があることに気づかせ，新たな動機付けにつなげることができれば，新鮮なワクワク感の創造につなげることができよう。

②　自立した学習者育成開始

ただし，小学校の学びと中学校の学びとの大きな違いの一つとして，中学校では英語の自立した学習者を育成すべきだと考える。そのためには，授業時間だけでは英語は身に付けることができないこと，家庭学習の大切さ，適切な難易度のインプットを増やし，誰に指示されたわけではないが自分でワクワクするような英語の課題を見つけて取り組むことが必要となる。(石井ほか　2000 ～ 2003)

また，教師は生徒の違いに応じて適切なコーチングができるようでありたい。

③　入門期の指導内容の見直し

以上の流れを踏まえ，中学校では毎年入門期の指導内容を見直すべきである。必ずしもその内容を毎年変更する必要はないかもしれないが，少なくとも，①小学校との事前の話し合いで知り得た小学校での学びの内容を検討し，計画に生かす，②授業開きに小学校時代での英語学習に関する調査を行い，実際にローマ字で自分の名前を書かせるなどして，学習の定着度を知る，③実際に新入生と授業をはじめ，生徒の反応に応じて指導内容を再検討する，といったことは行うべきだろう。

④　教育委員会への働きかけ

今まで述べてきた小中連携の核をなすのは，互いが授業を見せ合い，定期的に会合を持ち連絡し合うことだ。しかし，この一連の流れを一人の教諭が行うことは大変に困難だ。これらのことは，教育委員会が主導できちんと年間計画に位置づけなければならないこと

だ。私たちはこのような小さな積み重ねを大切に，これからの小中連携を有意義なものとしたい。

以上の流れをふまえ，次に４技能の統合的指導実践例を示す。

4. チャットを中心とした４技能の統合的活動

(1) 目的と内容

「チャット」とは「生徒同士で会話を展開してゆくコミュニケーション活動」（本多，2003）であり，数年前から教科書にも取り入れられている。昨年発表された中学校学習指導要領（2008）にも「チャット」の文字こそないが，２内容 (1) 言語活動の「イ 話すこと」の中には「つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること」が含まれ，また (2) 言語活動の取り扱いの〔言語の働きの例〕でも「コミュニケーションを円滑にする」ために「呼び掛ける・相づちをうつ・聞き直す・繰り返す」といったことを取り入れるようにとの記述があり，様々な実践例も多く聞かれるようになってきた（樫葉，2008; 道面，2009）。

チャット活動で自然に会話ができるためには，言いたいことを表現するのに必要な語彙や文法を習得しているのはもちろんのこと，適切な声の表情やイントネーション，また顔の表情や身振りなどの非言語的な要素も含め，様々な知識や技能を活用する必要がある。スピーチなどでもこれらのことは必要だが，チャットではさらに相手の応答に合わせて，即興でやりとりを行う。生徒たちは自分自身の生きた情報や感情を共有し，話す内容を協力して深めてゆくことができ，活動後の達成感も大きい。

(2) 指導例

主な指導手順は以下の通りである。

① トピックや話し始めの一文を提示し，教師どうしのデモや，先輩のビデオなどでモデルを提示する。

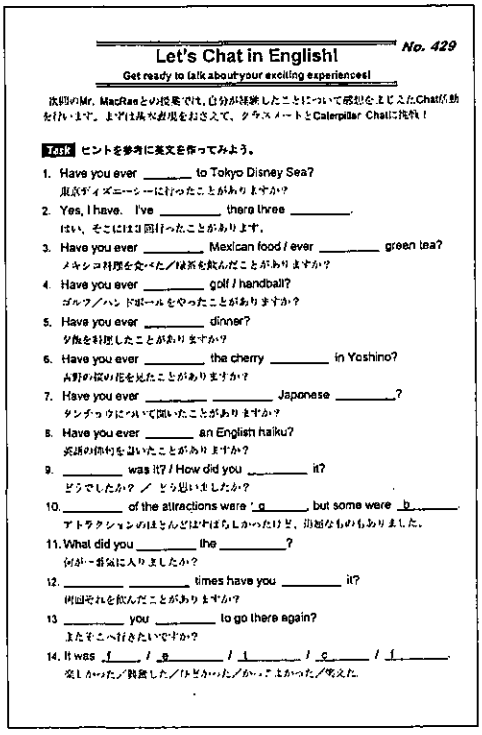
② 教科書やワークシートで使える表現を確認，練習させる（トピックに関する語彙，指定された文法表現，さらに話を引き出す質問など）。＜図１＞

③ 各自話したい内容を準備，練習させる。＜図２＞

④ ペアを変えながらチャットを行わせる。

⑤ 前に出て ALT と１対１でチャットを行わせる。他の生徒にはそれを聞かせる。

⑥ 振り返り活動を行う（録音したチャットのテープを聞いて書き起こしてくる，より適切な表現を考える，学年の優秀者のビデオを見て良いところを学びあうなど）。



No. 429

Let's Chat in English!

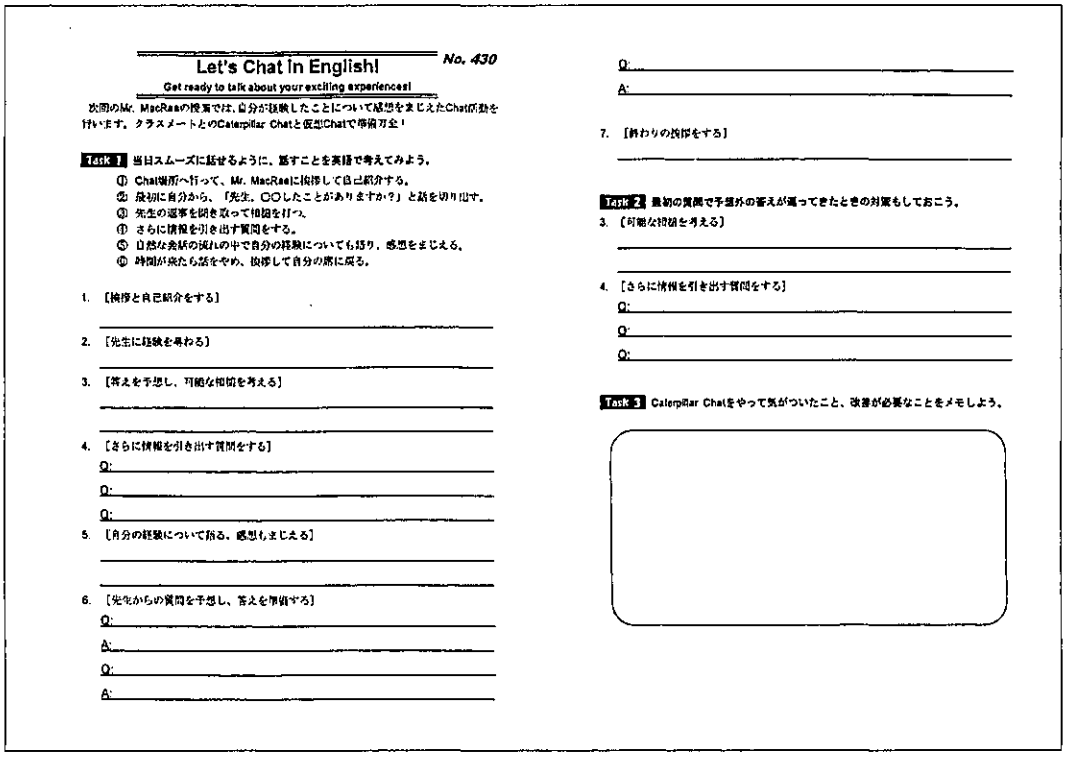
Get ready to talk about your exciting experiences!

次回のMr. MacRaeとの授業では，自分が経験したことについて感想をまじえたChat活動を行います。まずは表現をおさえて，クラスメートとCaterpillar Chatに挑戦！

Task ヒントを参考に英文を作ってみよう。

1. Have you ever _____ to Tokyo Disney Sea?
東京ディズニーシーに行ったことがありますか？
2. Yes, I have. I've _____ there three _____.
はい，そこには３回行ったことがあります。
3. Have you ever _____ Mexican food / ever _____ green tea?
メキシコ料理を食べた／緑茶を飲んだことがありますか？
4. Have you ever _____ golf / handball?
ゴルフ／ハンドボールをやったことがありますか？
5. Have you ever _____ dinner?
夕飯を料理したことがありますか？
6. Have you ever _____ the cherry _____ in Yoshino?
吉野の桜の花を見たことがありますか？
7. Have you ever _____ _____ Japanese _____?
タンチョウについて聞いたことがありますか？
8. Have you ever _____ an English haiku?
英語の俳句を書いたことがありますか？
9. _____ was it? / How did you _____ it?
どうでしたか？ ／ どう思いましたか？
10. _____ of the attractions were a _____, but some were b _____.
アトラクションのほとんどはわくわくしたけれど，面白くないものもありました。
11. What did you _____ the _____?
何が一番気に入りましたか？
12. _____ _____ times have you _____ it?
何回それを飲んだことがありますか？
13. _____ you _____ to go there again?
またそこへ行きたいですか？
14. It was f _____ / a _____ / i _____ / c _____ / t _____.
楽しかった／興奮した／ひどかった／かっこよかった／疲れた

〈図１〉使える表現ワークシート



Let's Chat in English!　No. 430

Get ready to talk about your exciting experiences!

次回のMr. MacRaeの授業では、自分が経験したことについて感想をまじえたChatが動を行います。クラスメートとのCaterpillar Chatと仮想Chatで準備万全！

Task 1 当日スムーズに話せるように、話すことを英語で考えてみよう。

① Chat場所へ行って、Mr. MacRaeに挨拶して自己紹介する。
② 最初に自分から、「先生、○○したことがありますか？」と話を切り出す。
③ 先生の返事を聞き取って相槌を打つ。
④ さらに情報を引き出す質問をする。
⑤ 自然な会話の流れの中で自分の経験についても話り、感想をまじえる。
⑥ 時間が来たら話をやめ、挨拶して自分の席に戻る。

1. [挨拶と自己紹介をする]
2. [先生に経験を尋ねる]
3. [答えを予想し、可能な相槌を考える]
4. [さらに情報を引き出す質問をする]
   Q:
   Q:
   Q:
5. [自分の経験について話る、感想もまじえる]
6. [先生からの質問を予想し、答えを準備する]
   Q:
   A:
   Q:
   A:
   Q:
   A:
7. [終わりの挨拶をする]

Task 2 最初の質問で予想外の答えが返ってきたときの対策もしておこう。

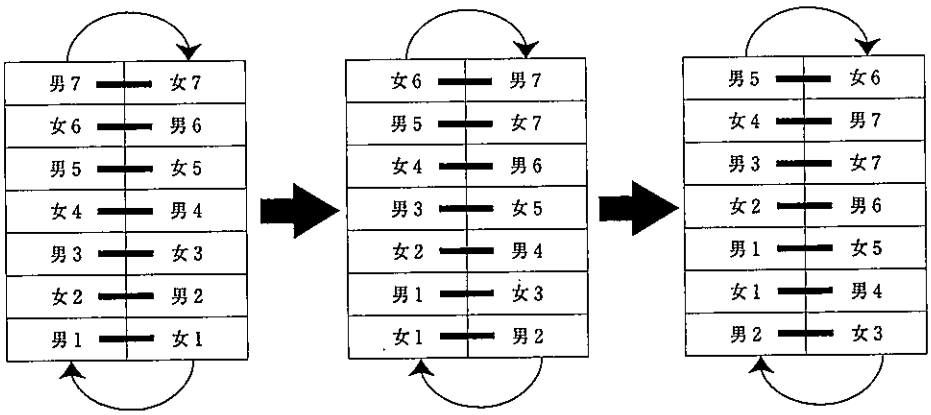
3. [可能な相槌を考える]
4. [さらに情報を引き出す質問をする]
   Q:
   Q:
   Q:

Task 3 Caterpillar Chatをやって気がついたこと、改善が必要なことをメモしよう。

〈図 2〉準備ワークシート

④のペアでのチャットの際にはいろいろなペアの作り方があるが，一例として本校では Caterpillar chat と呼んでいる活動を取り入れ，どんどん次のパートナーと話す練習をさせている。男女の座席が市松模様になっているため，隣り合った2列を1つの Caterpillar（キャタピラー：戦車の車輪に当たる部分）と見なし，制限時間の合図が鳴ったら，＜図3＞のように Caterpillar を1つ回転させ，新しいペアを組ませる。これを続けていくと，生徒は次々に違う相手と話すことができ，同じトピックでも相手が変わることにより，いくつもの会話のバリエーションを経験することができる。慣れていることは徐々に流暢に言えるようになっていくし，どうしても言いたいのにうまく言えないことも絞れてくる。また生徒は相手が使った英語表現を自分のチャットに取り入れ，すぐに使ってみるチャンスも持てる。何回か Caterpillar を回したところで，もう一度各自に言いたいことを準備しなおす時間を与えることもできるし，教師が気づいた点を全体に指摘することもできる。短い時間で多くの相手とたくさん話す練習をさせたいときに有用な方法である。

これまでに取り上げたトピックとしては，好きなスポーツ・音楽・食べ物・教科，長期休暇の予定・思い出，何かに対する意見とそう考える理由，今までに自分が経験したことなどがあり，特にトピックを定めず自由に話させたこともある。時間は1～2分が多く，随時授業に取り入れているが，年2回ほど，Team-teaching の授業で ALT とチャットを行い，評価に取り入れている。



〈図3〉Caterpillar での生徒の動き方

(3) 留意点

まず，5・6に挙げる他の活動と同様，段階を踏んだ指導が欠かせない。いきなり「英語で自由におしゃべりしなさい」と言うのではなく，英語の面でも情緒の面でも生徒が安心してチャットに取り組めるよう，(2) に挙げたような無理のない Small steps を設定する必要がある。

次にチャットを続けるためには，よい話し手であると同時に，よい「聞き手」でもあるようにと指導する必要がある。片方の生徒が質問ばかり，相手の生徒が答えてばかりでは一方的な尋問のようになってしまい，自然さが失われてしまう。自然な会話では聞き手は「そうなんだ」「すごいね」などの相づちや短いコメントをはさみながら相手の話を聞いており，こういった相づちが会話を滑らかにしている。「話す」「聞く」の役割の交換も自然に行われる。日本語での会話との比較などから，生徒にこういった点に気づかせ，"Oh, do you?" "That sounds great!" "How about you?" などの表現の導入（復習）につなげることができる。また始めのうちは，「主に尋ねる役」「主に答える役」など，大体の役割を決め，役割を交代しながら練習させるのもよいだろう。

チャットの際にはあまり正確さにこだわりすぎないことも重要である。正確に話そうとするあまり，言葉数が少なくなったり，ぎこちない沈黙が続いてしまったりするくらいなら，多少間違いがあっても，流暢に話せていることを評価するべきだろう。内容が誤解される恐れがあるようなミスは前述のように全体に指摘することもできるし，個別のミスは，個人の振り返り作業に委ねてもよいだろう。ただし，その際もミスの訂正にだけ注目させるのではなく，会話の流れが自然か，相手の言ったことに適切な相づちを打っているかなどといった点からも復習させるようにしたい。

(4) 成果と課題

本校でチャット活動を行って実感するのは，既に行っている他の発表活動ととても有機的に関連しているということだ。例えば，What am I?（私は何でしょうクイズ）での質問活動から，相手の発話を受けて関連する質問をする力が養われており，Speech & QA（スピーチとその内容に関する QA）の活動から，様々な種類の質問とその受け答えに慣れ親しんで

おり，Reading Show（音読発表会）の活動からは，場面に合った感情を伴って英語を発する力を身につけている。これらの活動で養われた力がみな、チャット活動の中で十分に発揮されているのが感じられる。

また，1分ないし2分，とにかく英語だけで何とか話し続けたという経験値は生徒の大きな自信となり，「英語でも何とかなるという度胸がついた」とのコメントも多く聞かれた。

今後の課題としては，チャットを特別な活動と位置づけるのではなく，少しずつでも毎回の授業に取り入れるなど，生徒にとってさらに身近なものにしてゆくこと，また言語表現だけでなく，視線・顔の表情・身振りなど非言語的（non-verbal）な要素も生徒に意識させるようにしてゆくこと，さらに、「書くこと」へ発展させる活動として，チャットで話し合った内容を短い文章でまとめるレポーティング活動を設定することなどが挙げられる。

5. スピーチを中心とした4技能の統合的活動

(1) 目的と内容

生徒の自己表現活動の1つとして行われるスピーチは，一般的には「話すこと」の活動と考えられている。自分の伝えたいことを，自分のことばで仲間の前で口頭発表する活動だからである。しかし，実際の指導においては，原稿執筆をさせることが多く，その視点から言えば「書くこと」の指導となりえる。一方，仲間の発表を聴取する側からすれば「聞くこと」の活動でもある。さらにモデル文を読んだり，自分や仲間の原稿を読んだりする「読むこと」の活動を設定することもできる。このように，スピーチはその指導の仕方によっては4技能を総合的に伸ばす統合的な活動となりえるのである。

ところが，多くの中学校ではモデル文を真似する程度のごく簡単なスピーチの指導にわっていることが多い。その主な理由は，人前で表現することが不得意な生徒が多い，自分でスピーチの原稿となる英文を書く能力がない生徒が多いなど，生徒側の困難点の心配からであったり，生徒の書いた原稿を修正する時間がない，そもそも教科書の内容をこなすのに精一杯でスピーチをさせる時間がない等，指導する側の問題点の心配からであったりする。しかし，そのような困難点や問題点は，指導方法を工夫すれば何とか解決できるのである。実際に，本校英語科でもいろいろなタイプのスピーチ活動を試行錯誤を繰り返しながら行い，各学年のカリキュラムに位置づけられるほど指導法が確立したスピーチ活動を開発してきた。以下にすでに複数年にわたって実践されてきたスピーチ活動を学年毎に整理してみる。

＜1年生＞

・仲間に自己紹介（7月）
・友人や家族（第三者）紹介（9月）
・ＡＬＴに自己紹介（10月）
・冬休みの思い出（1月）
・私の好きなもの（2月）

＜2年生＞

・夏休みの思い出（9月）
・私の街（11月）
・冬休みの予定（12月）
・冬休みの思い出（1月）

＜3年生＞

・春休みの思い出（4月）
・修学旅行の思い出（5月）
・私の好きなこと／もの（6月）
・夏休みの思い出（9月）
・私の好きな「葉っぱのフレディー」の場面（2月）

(2) 指導例

(1) でもふれたことであるが，スピーチ活動の指導は難しい。いきなり生徒に「とにかく自分の言いたいことを話してみろ」と突き放したのでは，活動自体が頓挫してしまうか，仮に実行できても教育効果の高い活動は期待できない。生徒自身が自信をもって発表に臨み，発表をすることによって成就感を得るようにするためには，適切なステップを踏んだ指導が欠かせないのである。そこで，ここではごく初期の簡単なスピーチ活動から，話の構成・内容及び英文も生徒が自分で考えて行う発展的なスピーチ活動までの指導事例を紹介する。

① 最初のスピーチ：1年生「自己紹介」

ア）実施内容

1年生の7月頃に行うもので，入学してからそれまでの学習で身につけた表現を使って自分のことを仲間に紹介する活動である。原稿の形態は7文程度のモデル文を示し，最初の5文は示された英文の空所に自分の情報を埋めさせることで完成させ，残りの2文は自由に書かせる。発表は全文を暗唱して行う。ただし，40秒間の持ち時間の中で終了しなければならない。

イ）指導内容

＜事前指導＞（1時間）

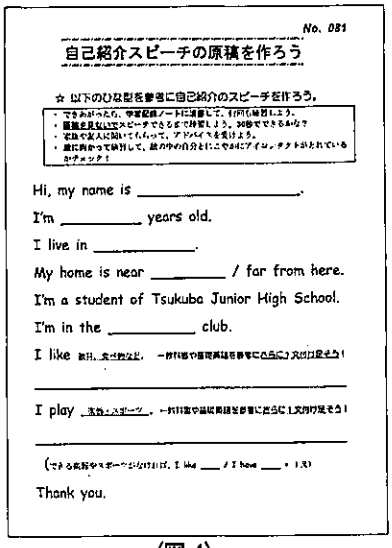
・モデル文が示されたワークシート（図4）を使って原稿を書かせる。
・完成した原稿の音読練習をさせる。
・ペアまたはグループで発表の練習をする。
・原稿の修正を行わせる。

＜発表・聴取指導＞（1時間）

・一人ずつ順番に発表させる（40秒後のタイマー音で発表者が入れ替わる）。発表する際には，ポータブル・カセット・レコーダーで発表を録音させる。
・仲間の発表を聴取するときは，評価表（図5）に評価観点別の得点を記入しながら聞かせる。また，全員の発表が終了したところで，優秀な発表者を投票させる。

＜事後指導＞（家庭学習）

・振り返りの学習用紙（図6）を使い，自分の発表を家庭で聞いて，自分の発表を自己評価させると共に，仲間の発表のよい点に気づかせる。


No. 081

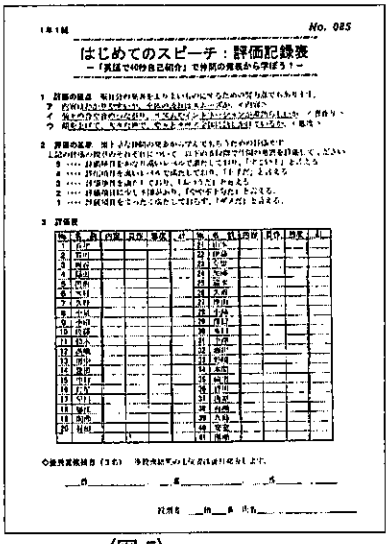
自己紹介スピーチの原稿を作ろう

☆ 以下のひな型を参考に自己紹介のスピーチを作ろう。

・できあがったら，学習記録ノートに清書して，何回も練習しよう。
・最後を見ないでスピーチできるまで練習しよう。30秒でできるかな？
・家族や友人に聞いてもらって，アドバイスを受けよう。
・最後に声かけて練習して，最後の中の自分とにこやかにアイコンタクトがとれているかチェック！

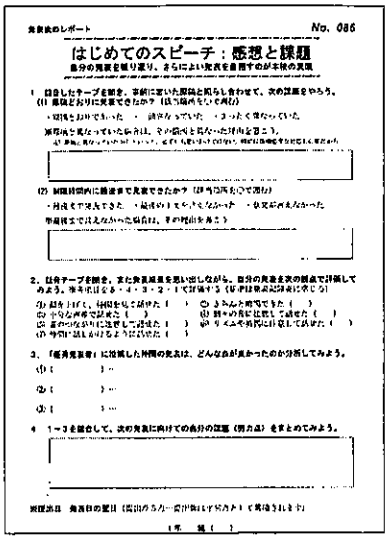
Hi, my name is _____.
I'm _____ years old.
I live in _____.
My home is near _____ / far from here.
I'm a student of Tsukuba Junior High School.
I'm in the _____ club.
I like 教科，食べ物など。←教科書や語彙表を参考にさらに2文付け足そう！
_____
I play 運動・スポーツ。←教科書や語彙表を参考にさらに1文付け足そう！
_____
（できる動詞やスポーツがなければ，I like ___ / I have ___ + 1文）
Thank you.

〈図4〉
原稿用紙


No. 085

はじめてのスピーチ：評価記録表

〈図 5〉
発表評価用紙用紙


No. 086

はじめてのスピーチ：感想と課題

〈図 6〉
振り返り学習用紙

② スピーチとＱ＆Ａ：２年生「私の街」

ア）実施内容

2 年生の 11 月に行うもので，There is/are.... の文を使って自分が住んでいる街の好きな場所について発表し，その後に ALT からの質問に答える活動である。原稿の形態は 10 文程度のモデル原稿を示し，ほぼそれに沿った構成と必要表現（ここでは There is/are....）を利用しながらも，内容は自由に考えさせるものである。発表は話の流れを示したパームカードを見ることはできるが，基本的には全文を暗唱して行う。発表は持ち時間制で，スピーチ部門が 50 秒，Q&A 部門が 50 秒の計 1 分 40 秒で発表を終了しなければならない。

イ）指導内容

＜事前指導＞

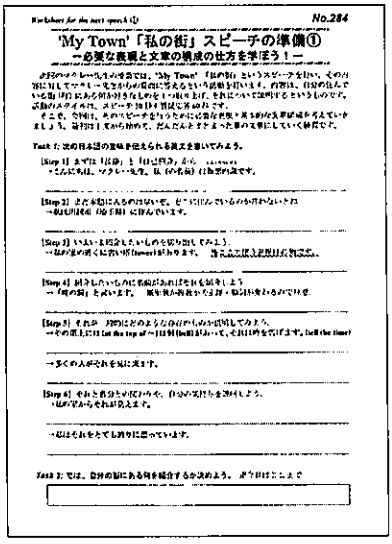
（3 時間。ただし，他の学習活動と並行して行う）

・スピーチの構成がわかる和文英訳のワークシート（図 7）に取り組み，話の流れと言うべき表現について学ばせる。

・モデル原稿を参考にしながら自分のオリジナル原稿の下書きをワークシート（図 8）に書かせる。

・下書き原稿を使ってペアでスピーチ部門の発表を行って情報交換を行わせ，その活動で得た情報を元にパートナーのスピーチの内容を他のペアに報告させる。（図 8 参照）

・スピーチ練習とレポーティング活動を通して学んだことを元に清書原稿を書かせる。また，


No.284

'My Town'「私の街」スピーチの準備①

〈図 7〉
構成及び必要表現学習用紙

ALT から質問されそうな内容についての想定問答を書かせる（図 9）。

＜発表・聴取指導＞（2 時間）

・一人ずつ順番に発表させる（発表 50 秒＋ Q&A50 秒の計 1 分 40 秒で入れ替わる）。スピーチ及び Q&A はすべてポータブル・カセット・レコーダーで録音させる。

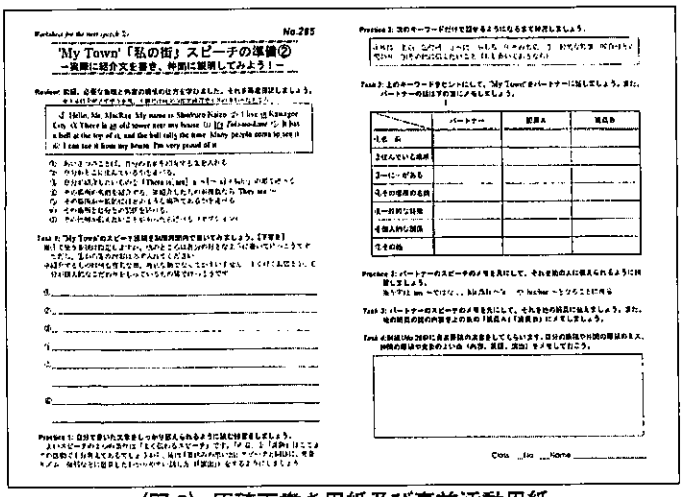
・仲間の発表を聴取するときは，評価表に評価観点別の得点を記入しながら聞かせる。また，全員の発表が終了したところで，優秀な発表者を投票させる。

＜事後指導＞

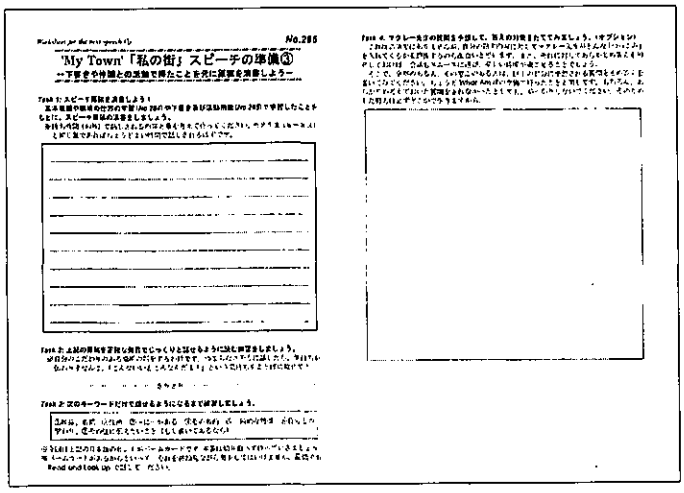
・振り返りの学習用紙（図 10）を使い，自分の発表を家庭で聞いてスピーチ及び Q&A の発言全てを書き起こさせる。その上で自分の発表を自己評価させると共に，仲間の発表のよい点に気づかせる。（家庭学習）

・級友からの評価が高かった優秀者を発表する。ステッカーなどの褒賞を与えることもある。

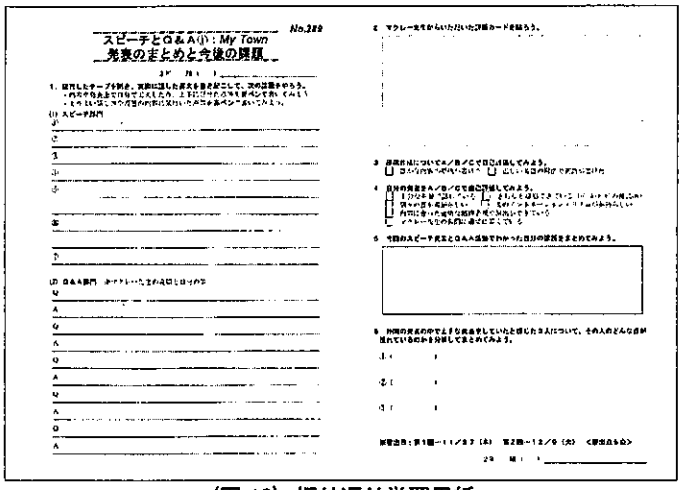
・学年の優秀者の発表をビデオで視聴し，良い点を学び合う。



〈図 8〉原稿下書き用紙及び事前活動用紙



〈図 9〉清書原稿用紙及び想定問答対策用紙


No.289

スピーチとQ&A(1)：My Town

発表のまとめと今後の課題

〈図 10〉振り返り学習用紙

③ 自由スピーチ：2年生「Show & Tell」

ア）実施内容

本校では平成16年度まで約30年間「英語スピーチの授業」を実施していた。現在は授業時間削減に伴うカリキュラム編成再考の過程で，指導にかかる労力と教育効果の兼ね合いから行っていないが，その指導のノウハウは役立つと思うので紹介する。

この活動は，2年生の授業時間のうちの週1時間をあてて行っていたもので，生徒が自由に書いた原稿を元に発表を行うというものである。原稿を書かせる時点では，自由に書かせるのはかなりハードルの高い活動となるので，話の構成を考えさせること，原稿の執筆を行うこと，発表の練習を行うことについて順に入念な個別指導を行う。一方，聴取側の活動としては，初期の頃は仲間が発表者に質問をするというポスト・アクティビティー（PA）があったが，平成7年度よりALTとのTTに絡めてややゲーム的要素のあるQ&A大会というPAが数年間続けられた。しかし，いずれも聴取側の活動量が少ないという反省から，平成13年度からは発表を聞きながらキーワードをメモさせた後に，一定時間に発表内容の要点をできるだけ多く再生するというライティング活動がPAとして設定された。

イ）指導内容

＜事前指導＞（個別指導）

・企画書（図11）を使って，テーマ，話の構成，見せる物等を考えさせ，それを元に面接指導を行い，最終的な原稿執筆の方向性を決める。なお，後年は話の構成を考えさせる時点でマッピングをさせた。

・原稿（約200～250語）を書かせたところで原稿を提出させ，修正したものを面接して返却する。

・完成した原稿（図12）を暗記させ，見せる物を持参させて，発表指導を個別面接で行う。視聴覚機器を利用する場合はその利用法もシミュレートする。

＜発表・聴取指導＞（1時間に3～6名。PAの内容によって異なる）

・暗唱発表をさせる。特に時間制限はない。発表する際には，ポータブル・カセッ

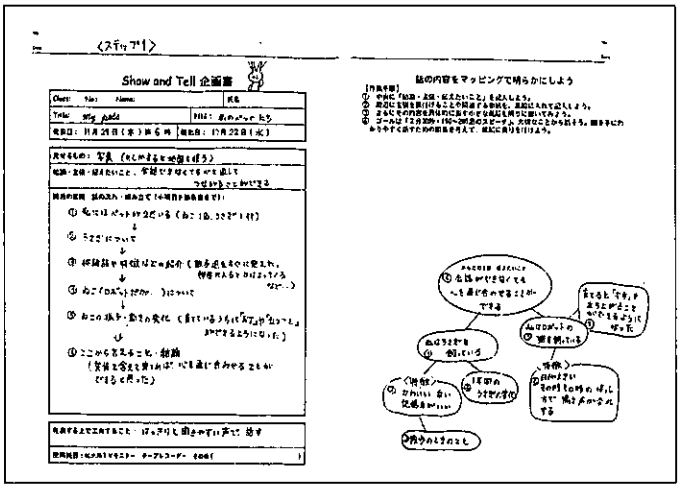
ト・レコーダーで発表を録音させる。

・仲間の発表を聴取するときは，記録表にキーワードをメモさせ，同時に評価表に発表に対する感想を書かせる。

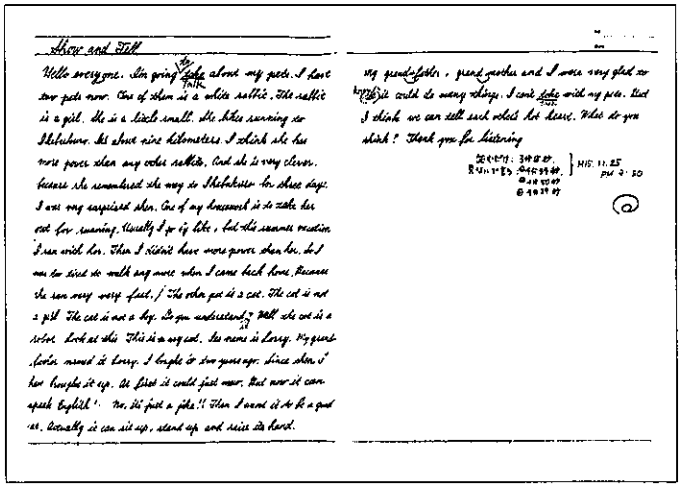
・PA を行わせる。

＜事後指導＞（家庭学習）

・教師の評価表と仲間の評価表を渡し，「Show & Tell ノート」に発表のまとめを行わせる。具体的な学習内容は，発表音声の書き起こし，仲間からの評価のまとめ等である。



〈図 11〉企画書



〈図 12〉完成原稿

6. ディスカッションを中心とした４技能の統合的活動

(1) 目的と内容

３年生ともなると，多くの教科書でディスカッションをテーマとした課が設けられている。このディスカッション活動は，ぜひ正面から取り上げて活動させたい。

教科書で紹介されている I agree. I don't think so. などの表現を実際に使うことができる

等の意味もあるが，こうした活動には，もっと大きい意義がある。何かを話し合って決めるということは，母語でもとても重要な言語活動であるが，生徒たちは決して得意ではない。その証拠に，何か決める場面では，意見の出ないまま多数決で手をあげるというような情けない場面をみることも多い。「私はこう思う。」と考えを明らかにして，それを友人と交換しあうことは，積極的に推進して取り入れたい。スピーチなどの自己表現でもそうだが，母語では照れてしまうようなことでも，外国語であるためにその抵抗感が減る，ということもある。

この活動での困難点の一つは，「意見が思い浮かばない」，もう一つは「英語でどう表現したらよいかわからない」である。

どちらの場合も，解決の鍵を握るのは，それに先だってどのような英語を聞かせるか，読ませるかということである。

まず「どっちでもいいんじゃないの」「わかんない」と言わせず，後で意見が変わってもよいから必ずどちらかに自分の意見を決めるようにさせる。

(2) 指導例

① テーマ「遠足の行き先を決める」(1時間の中で行った授業)

通常の課ではなく，I agree. などの表現を学ばせるために「遠足の行き先を決める」というテーマの特別ページが教科書に設けられていた。これはその1ページを扱ったものである。

指導の流れ

1. 教師が，本校恒例の卒業遠足について英語で紹介し，過去に多く選ばれていた候補地を紹介する。
   →リスニング活動をする中で，動機付けをし，また必要な語彙に触れる。
2. 上げられた候補地のうち，この3月に自分達が行きたい場所を挙手させる。
   →自分の考えを取り敢えず決定させる。
3. そこを推薦する理由を何人かに英語で言わせる。
   教師が適宜修正しながら，全体で共有できるようにする。
4. 同じテーマで展開されている教科書のCDを聞かせる。
   教科書の登場人物がどこを，なぜ推薦しているかを聞き取る。
5. 教科書を開いて読み，語彙や表現を確実なものにする。
6. 自分達の遠足の候補地に話題を戻し，「このクラスの行き先の候補地をグループで話しあいなさい」と指示する。(4人グループで，英語で意見を交換しあう。ここで，学習した表現を使いながら，スピーキングする。)
7. 各グループがどこを選んだか，発表させ，クラスとして多かった候補地を決定する。

この実践は1時間だけのものだったので，ここまでの活動であるが，時間があれば，自分の考え，あるいは，ディスカッションを経てわかった多数者の意見を書かせることができる。

② テーマ「事故報道で，日本人の数を言うことの是非」(数時間で行った実践)

海外生活経験の長い友人が「事故報道で日本人の数だけを報道するのはおかしい」と言うのを聞いて，普段全く気にとめていなかっただけにおもしろいと思い，自分の生徒にど

う思うか聞いてみたいと思ったので設定したテーマである。

指導の流れ

1. 1つの考えを英語の文章で読む。

この時は，語彙も表現もはじめは全く生徒はわからない。そこで，このきっかけとなった発言の友人になぜこれがおかしいのかを，中学3年生にわかる英語で書いてもらった。B4判1枚にびっしりの長文が届いた。難しい単語は，下に教師が訳語を書き込み，それを読むことからはじまった。どの生徒も，新たな視点に興味を引かれて読み進めていた。

2. 教師から，読んだものとは対立する考えを英語で聞く。

読んだ内容を簡単な英語でまとめる一方，教師が今までの自分の考えを英語で言い，生徒が両方の立場を表す表現に触れられるようにする。

3. ペアを作って，自分は賛同するか否かを，パートナーに伝える。また全体の数を挙手で知る。

まだ話し合いをするほど，練り上がっていないが，現時点での自分の考えをまず明らかにする。はじめは，I think he is right. I don't think he is right. 程度の英文でよいが，当然その後には，なんとかその根拠を言わなくてはならない。ここで「こういう表現が欲しい」という気にさせる。

4. 別の相手に，自分の考えをよりよく伝えられるよう，英語表現を考える。

ペアを変えて自分の考えを伝えるのだが，その前に，1回目に言えなかった表現を今後は言えるように準備させる。とはいえ，あまり長い文章になったり，難しい単語を使ってもわからないので，無理をせずに短めのものにさせる。

5. ペアを変えて自分の考えを伝える。また，全体で発表する。

③ テーマ「電子ゲームを小学生に買い与えるべきか」(数時間で行った実践)

教科書に「テレビゲームの是非」というテーマの課があった。なので，両方の立場の英語表現の多くは，ほぼ教科書にあった。さらに興味を持たせるために，「小学校3年生である授業者の息子に買い与えるべきか，アドバイスが欲しい」という状況設定をした。

指導の流れは，テーマ①の時と似ているが，この時は長い Reading はなく，その代わり Writing 活動を増やした。クラスメイトの考えを聞いた後，自分の考えをB5判に文章で書くようにした。

回収の後，またそれをクラスで読み合って，学び合うことができる。

他に今まで行ったディスカッションのテーマ例を紹介する。

・小学校での英語教育の是非（早期英語教育の是非）
・高校での必修英語廃止
・学校の掃除は，生徒がするべきか外注するべきか
・優先席は廃止するべきか

7. 成果と今後の課題

本校英語科では，昨年度から2年間にわたって「新学習指導要領に対応した授業作りの工

夫」をテーマにして研究を重ねてきた。テーマの表面的な表現からすると，新旧の学習指導要領で異なっている部分に焦点を当て，それに対して単位時間をどのように構成する授業が望ましいのかという研究を進めているような印象を与えるかもしれないが，昨年度と本年度の本冊子を精読すれば，本校英語科がそのような些末なことに振り回されているのではなく，英語教育のより本質的かつ恒久的な課題に焦点を当ててきているのがわかるはずである。そのような視点から本研究を振り返ると，本校英語科が今後考えていかなければいけないことは，次のような2点であることが見えてきた。そしてそれらは，多少のちがいはあれども，他のどの中学校にも当てはまることではないかと思われる。

(1) 小学校英語活動を経験した生徒に対する実質的な入門期指導の再構成

本校の入門期指導は，大正時代から90年近くにわたって，教科書を使わずに音声を中心とした徹底的な基礎訓練を行ってきたことは過去に何度も述べてきた。そしてそれは，小学校で英語活動を経験してきた生徒に，教科として英語を学ばせるための「リセット」を行うものとしても有効であることも実感している。もちろん，そうであっても以前とまったく同じ授業を行っているわけではなく，年々確実に英語学習の経験値が変化する生徒の実態に合わせて，入門期指導の内容を微調整している。しかし，来年以降はそれが微調整の範囲で収まるものなのか，大改修が必要となるものなのかは，現時点でははっきりしない。おそらくこれに対しては，今後数年間に入学してきた生徒を実際に指導する中で，中・長期的なスパンで考えて目指すべき方向性を見いだすのが実際的な対応であろう。

現在，生徒の3分の2を占める附属小学校出身者は，小学生のときに言語習得をねらいとした英語学習をほとんど経験してきていない。また，残りの3分の1を占める他の小学校の出身者も，程度の差こそあれ，それほど本格的な英語学習は経験していない。しかし，来年度からは附属小学校の出身者が週1時間の英語活動を経験して入学してくることになっており，さらに4年後には小学校3年生から4年間それを経験してきた生徒が入学してくることになっている。そして，他の小学校の出身者も2年間の英語活動を全員が経験した上で中学校の英語の授業を受けるわけである。附属小学校の指導に関しては，本校には数年前から「4校研」（附属小・中・高・大学の教科別合同研究組織）という教員の学習機会が年に数回あり，それぞれの実践を共有しながら，小・中・高をつなぐ英語教育の理念と実際の指導の柱を構築しつつ，小学校で指導すべき内容について共に考えていく体勢を整えてきた。また，英語活動だけでなく，小学校の他の教科（例えば国語など）の授業も積極的に参観し，そこで指導されていることがどのように中学校の英語の授業における生徒のパフォーマンスに影響を与えているのかということもわかってきた。したがって，今後も特に附属小の英語活動部（本年度より専科の教員が1名増員された）と連携を密にとっていきたいと考えている。

(2) 3年後の生徒の姿を見据えた指導カリキュラムの再構成

小学校の英語活動が導入されることで，新学習指導要領に関する話題は入門期指導に偏りがちであるが，より重要な課題は中学3年間でどのような力を生徒につけさせるかということである。

中学校英語科における指導では，3年後にどのような生徒を育てたいのかという具体的

なイメージを持つことが大切であると言われる。それは，それを持つことができれば，そこからバックワード・デザインで各学年，各学期，各単元，そして各授業で何をどのように指導したらいいかということが見えてくるからである。その意味で言うと，本校では平成8年度に採択した，3年間で「育てたい生徒像」が現在でも生きており，それは今後の教育活動においても揺るぎないものと確信している。しかし，それとほぼ同時期に設計した「『聞くこと』『話すこと』を中心とした3年間の指導計画」は，その後の授業時間数の減少や時代の変化によって変更が迫られているものもあり，実際に毎年少しずつ削除されたり変更されたりしてきている。平成19年度の本冊子には平成18年度の「『話すこと』を中心とした言語活動」の指導事例一覧が載っているが，それはあくまでも各学年の担当者が中心となって試行したものであって，英語科全員の確固たるコンセンサスを得て実施されたものではない（もっとも，その中の多くは結果的に次年度以降も行われているが…）。したがって，この点における本校英語科の課題は，現スタッフの実践例をきちんとまとめ，それを3年間のカリキュラムとして位置づけられるものになるまでコンセンサスを得ることである。

なお，このことは，実は全国の中学校で行うべき最も大切なことでもある。本校英語科スタッフが個々に調査した結果によると，全国のほとんどの中学校では英語教師の間で実践が共有されておらず，個々の教師がバラバラな3年後の生徒の姿をイメージして指導しているというのが実態である。公立中学校の場合は，教師の異動周期が年々短くなっている実態があり，学校単位の「育てたい生徒像」や実質的な3年間の指導計画を作るのは難しいことかもしれないが，そうであるとすれば，自治体や研究会単位でそれらを設定することを目指すことも考えられるであろう。

＜参考文献＞

石井光太郎ほか．(2000)．「自立した学習者」を育てるカリキュラム作り(1)～入門期指導に焦点をあてて～『筑波大学附属中学校研究協議会発表要項』第28回，pp.73-85

石井光太郎ほか．(2001)．「自立した学習者」を育てるカリキュラム作り(2)～入門期後の指導に焦点をあてて～『筑波大学附属中学校研究協議会発表要項』第29回，pp.103-116

石井光太郎ほか．(2002)．「自立した学習者」を育てるカリキュラム作り(3)～第2・第3学年の指導に焦点をあてて～『筑波大学附属中学校研究協議会発表要項』第30回，pp.83-102

石井光太郎ほか．(2003)．「自立した学習者」を育てるカリキュラム作り(4)～学習の継続を支援する手だてに焦点をあてて～『筑波大学附属中学校研究協議会発表要項』第31回，pp.97-106

本多敏幸．(2003)．『到達目標に向けての指導と評価』教育出版．

文部科学省．(2008)．『学習指導要領』

樫葉みつ子．(2008)．『英語で伝え合う力を鍛える！1分間チャット＆スピーチ・ミニディベート28』 明治図書．

道面和枝．(2009)．『中2で楽しく会話が続く！「2分間チャット」指導の基礎・基本』 明治図書．